

心を形に表す礼儀作法に関する一考察 —「茶の湯のころ」の視点から—

倉永 愛子

Etiquete Represents The Heart Shape

Aiko KURANAGA

1 はじめに

本学の学生は、入学後の1年間卒業必修科目「人間の研究 I a 礼節」を学ぶ。

この講義は、鰐塚山・霧島山系を臨む風光明媚な丘に立つ「明教庵」の敷地に入るところから始まるのである。

清楚な基準服に身を包んだ学生達は、階段を上り終えた入口で立ち止まり、姿勢を正し一礼する。その後、姿勢を正し遠く霧島山系を一望できる通路を歩く。その間にも学生一人ひとりの様々な心遣いが姿となって表れる。玄関に入る、靴を脱ぐ、廊下を歩く、和室への入室等、何気ない日常の立ち居振る舞いの中に、実はその人の心遣いやその人間性が姿となって相手に伝わるのである。

この礼節の講義は、和室の入室から始まる。早く来た学生から順に廊下に正座し、「お先に」という言葉を次の学友に声かけし、「失礼いたします」と挨拶後、襖を開けて入室を始めるのである。和室からは見えないしんとした廊下のその限られた空間で、互いに周囲への気配りをしながら、指示待ちではなく主体的に即座に判断して、「頃合い」を見て行動に転じる力が育つ。互いに「目配り・気配り・心配り」を実際に体現し、行動的教養を修得する一時となる。

所謂、互いの人間性に触れ合う大切な時であり、第1印象として相手の心に刻み込まれる。少し意識を高く持ち、何回となく一連の立ち居振る舞いを行い続けることで、やがて大切なことに気付き始める時に至る。その気付きが己自身を磨き育てることになるのである。ただ、指示され指摘を受け、その指示されるがままに動作を行うのでは、その場限りの姿となり、必ずしも身に付いたとは言えない。実際に自ら動作を行い、その場で自ら気付き、深く考え試行錯誤し、得心して自らの意識を高めることで、初めて自身の姿となり「身に付く」のである。

近年、メディア等で映し出される所謂「大人」と呼ばれる方々の姿を拝見する時、その場に合った服装や髪型、立ち居振る舞いや言葉遣いなどは実に様々なものがあり、目を疑う場面に遭遇することが多くなってきたという現実があることは否めない。果たしてそれで良いのであろうか。場に応じて、あるべき姿を意識し振る舞うことができるということは人として大切なことである。

その人の「心」が「姿」となり、その人の「第1印象」に繋がる「大切なこと」であるのだということに気付かせ、考えさせ、判断し行動に移す姿へと導いていくということ。所謂、「自他の人間性を尊重し、かつ己を律する精神」の具現化は、これからの世代を担っていく学生にとって「心の軸」となる大切なテー

マであると言える。様々な場に応じて己の心を動かし、気付き、考え、行動・実践力に繋げ、誠実に臨機応変にその「心」を言葉・表情・姿・行動などの「形」として、相手の心に届けることができるということは、「人としての品性」そのものと言える。

学生が意識を高く持ち、人としての品性を磨き、自ら新たに次の課題を見出し、この一年間を丁寧に一つ一つ「自己練磨へと繋げていく時」としていくことを願う。

本稿では、日本人がこれまで長い間大切に伝え受け継いできた日本の伝統文化「心を形に表す礼儀作法」について「茶の湯のこころ」を通して考察していきたい。

2 礼に始まり礼に終わる

「第1印象は3秒で決まる」とよく言われているが、私たちは日常生活の様々な場面で多くの人たちと出会っている。確かに、瞬時に「好印象」と感じ温かく爽やかな思いに包まれる時も在れば、残念ながらその逆の印象に包まれる場面が多いことも否めない。

「小笠原流伝書（小笠原清忠，2015，『小笠原流伝書を読む』）」の中に、「礼に始まり礼に終わる」という教えがある。つまり、人として最初から最後まで一貫して礼に則していることが求められ、礼は互いの誠心がそれぞれ心に響くものであることが肝要だということである。

更に「一事万事、万事一事」とし、「例えば一つのことを自在にする時は、万事に通ずるなり。万事もまた一事に通ずるなり。何とすれば、心不変にして気の切れることなく、詰まることなく、進むことなくして、一事に達せば、一にあっても少なきことなく、万にあっても多くなることなきものなり。しかれば一事万事、万事一事なるべし。」と記されている。「一事が万事」とは年長者からの戒めの言葉として良く耳にした言葉である。

また、「江ノ島お辞儀に二度返事」について、膝を曲げてぺこぺこするお辞儀と「ハイハイ」と軽く二度答える返事のこと、どちらも相手への敬愛の心が欠けていることを意味する。形だけの礼と、一度だけであっても心を込めた礼と、どちらが相手の心に響くかは言うまでも無いことであると記されている。このような心を込めた礼に、もっと洗練された姿・形を身に付けていくことで更に相手の心に響くものとなる。

3 礼儀作法が人をつくる

「三つ子の魂百まで」と言われるが、乳児、幼児、児童と成長していく子どもたちには、その成長に合わせて、社会生活を営むための共通の言語や動作を教える必要があり、それらは自然のうちに、それぞれの家庭の雰囲気の中で教えられ、感化され、親の規範が基となって、日頃の生活の中で形づくられていくのである。

このことについて、この「小笠原流伝書」によると、「礼法または作法とは、違和感なく社会生活が円滑に行われるための大切な自然の営みの一つである」とし、「幼児には幼児の、児童には児童の、そして社会人には社会人の生活があり、それぞれの生活をする中で言語や作法が、いつの間にか獲得され、このいつの間にか獲得されているということが一番大事なのだ」とある。我々の日々の生活の中での人と人との関わり合い、その場その時の「心を伴った」一つ一つの営みが人としていかに大切なことであるかということなのである。

更に、立ち居振る舞いについて、以下のように記されている。

「立ち居振る舞いという動作は、その場その場で実際に役に立たなければなりません。無駄を省き、効率的で、その時にふさわしい動きをすると、それが見ていて美しい動きとなります。『実用・省略・美』が一体となった時、初めて美しく正しい動作となって映ります。」

つまり、日常生活の様々な場面で、あらゆる事態に即応できるように、自然な行動としての約束が「形」であり、それが活用できるものでなくては「形」とは言えないのである。「心」が相手に対して向かう時、その心の本当の姿を体が受け取り、結果として表に「形」として示されるのである。

基本となる大切な心得として、「正しい姿勢の自覚」「筋肉の働きに反しない」「物の機能を大切にする」「環境や相手に対する自分の位置（間柄や間）を常に考える」、以上の四つについて明記されており、礼儀作法とは実用的で無駄のない美しい動きに繋がっていることが解る。

無駄な動きを省き、その場に必要な機能を最優先していくことの出来る気遣い・心遣いが大切で、しかも自然にさりげなく振る舞うことが出来るようになると、見る人には美しく調和のとれた「姿」として映り、「その人の品性」が相手の「心」に伝わるのである。

また、「仕草」について、この「小笠原流伝書」には「人間の体の機能と、物の機能が理解された時に、それが『仕草』として表れるものである」と明記されている。さりげないその人の「仕草」一つ一つの中にその人の「心」があり、その「心」を伴った立ち居振る舞いとして「相手の心」に届く。

我々は、多忙な日常の生活の中でともすると無意識の内に、相手に対し無礼な言動・心ない振る舞いに至ってしまい、その結果、相手の心を深く傷つけることに繋がることになりかねない。

一般的に、礼儀作法は形式的なものと思われがちであるが、その場その時に応じて、日頃から常に様々な生活の場面の中で意識を高く持ち、人としての品性として身に付けておくことは大切なことである。「目に立つならば、それも不躰」と言われている。この心を伴った礼儀、場に応じた言葉掛けや動作の一つ一つがその人の姿となって相手の心に届き、所謂「行動的教養」としてその人の品性が相手の心に届き伝わるのである。

4 「心」と「形」で形づくる「礼」

「礼法稽古法」（昭和38年 小笠原清信）の中で、心と形について次のように記されている。

礼ということは、一つは心であり、一つは形であり、一つはその応用であると考えられる。知的教養は、たとえば、学校教育のように小学校、中学校と体系づけられて教えられる。人に迷惑をかけない、言葉を換えれば「自他の人格の尊重」ということは教育基本法にも明示されているように、学校教育の芯であり、自己の行動に責任を持つような、社会人としての人間性を育成することが、教育の目標であることは誰もが知っていることである。このような目標に少しでも役に立つように稽古していこうとすることは、当然のことであり、これは封建制度でも階級意識でもない。

「第一の心」というのは、このような目標に向かっての心構えをさすもので、これは知的教養により補われていくものと考えられる。この行動の教育は、ある程度は学校教育において行われるが、それは組織立てられたもの、体系立てられたものものではなく、先生の教養により生徒に示されてくるものである。しかし、学校生活は限られたものであり、大部分の生活時間は家庭生活の中、あるいは社会生活（交友関係など）の中に自然に修得されていく。

行動の教養がしっかりと身に付く時期は、現在の学術傾向から大方の意見として、就学前までが大切だということが定説となっている。小学校入学前の生活時間は、家の生活が中心であるので、行動の教育はこの家の雰囲気の中に形作られてゆくとも言える。

5 家庭での教育について

「小笠原流の伝書を読む」の「第2章 小笠原流の教え」の中で、「家庭での教育」について具体的に次のように述べられている。

「家の中の教育は、学校ほど組織的でも、体系的でもない。伝統的な雰囲気の中に、いつの間にか教

化されていくものであり、家という境圀の中に、社会と関連を持ちながら、人間性が方向づけられてくるのである。嗜みのある、教養豊かな家庭に育ったものと、全く子供を放っておく無関心な家庭では、方向性の差の出てくることは当然であろう。

われわれは、この時代の子供は、子供自身の主体的解決の力を育てるように方向づけることで、親としては子供の立場を考えて、その方向付けのためには、制限や干渉は多少あっても、反省と合理的態度で臨むことが必要なのである」としている。そして、更に次のように記されている。

「そして、この時代に基本的な生活習慣は自立できるようにしておくことも親の責任で、食事は自分ででき、排便も一人ででき、着物も一人で着られるように、あるいは食事の前に手を洗い、口をすすぐこと等、また道の横断にも注意して行くくらいのことは、五歳くらいまでには出来るはずである。親の嗜みによっては、食事の挨拶も何故すべきかを理解できるのは三歳くらい。寝る時の挨拶も四歳くらいで身に付いてくるはずである。食事前に手を洗うことも、また髪をとかすことも五歳くらいで自然に自分のものとなってくる。この時代に無責任に子供を閑却しておくと、不精な、何となく不潔さを持った人間性にも育てられる」と明記している。

また、「箸を持つ」ということについても、具体的に次のように述べられており興味深い。

「五ないし六歳頃教えてやれば、『正しく、効果的に、他人が見て美しい』いわゆる普通の持ち方をすぐ会得する。もし、この機会を逸すると、何時までたっても握り箸のような不器用さを、他人にいつも示しているような握り方となる」としている。確かにその通りである。

教えるべきことは、時期を逸することなく丁寧にしっかりと教え伝え導いていくことは大事なことであり、放任・閑却では困るのである。折に触れ、人としての在るべき姿・品性についてきめ細やかな導き・助言を行っていくことが求められる。乳幼児期よりその子に関わり寄り添う大人自身の関わり方次第で、その子の人格形成は大きく左右されると言っても過言ではない。その責任は大であると言える。

更に、「公共マナー」については、同じく次のように述べられている。

「電車の中で、二人分の席を一人で頑張っていたり、混雑した車両の中で大きく広げて新聞を読んだり、公衆の中で悪酔いし、他人に迷惑を掛ける人が多く見られる。また、自分の知り合いだけには進んで席を譲るが、老人に対しては不干渉、あるいは降りる口と、乗る口を別にして混雑を避けている電車ではわざと乗り口から降りてくる青年などを見ると、やはり行動の教育、しかも組織的、体系的な教養が必要な気がしてくる。特に大学生等にこのような、小学生でも行わないような軌道に外れる行為を見せつけられると、頭に入れる知的教養だけでなく、言語動作の最小限度の基準は教える必要があるのだと考えざるを得ない」と記されている。

更に続く。「学校の教室で、講義を聞きながらチューインガムを食べ、新聞を広げて読み、また遅れてきても教師に挨拶もせず席に着き、途中で出ていく生徒等、無自覚で行っているのも、一度注意すれば、必ずしなくなる。ということは、悪いということが実感として出てきたことで、これが正しい方向づけである。それを放り出しておけば、何時までも無自覚で、これが社会に出てから大きな失敗につながることにもなりかねないのである」とある。

また、この「小笠原流伝書」には「第二の形」「第三の応用動作」について事例を挙げ記されている。「『第二の形』というのは、行動の教養で、その心の深さ、広さ、身に付いた教養が、どのように教養の場で示されてくるかということで、作法教育において、学校教育の目標に対して補う大きな課題である。電車の中で、大きな声で話している若者達の姿。例え全員がそうでないにしても、一人でもそのような姿があれば、残念で仕方が無い」とある。

互いに心を持った魂を持った人間なのである。「ならぬものはならぬのである」ことに気付かせ、振り返らせ、考えさせることは、人として成長していく上で欠くことのできない大事な躰である。そして、

このことは幼いときから育み育てていかなければならない大切な品性なのである。身近にいる親そして家族、更には地域社会が見過ごすことなく、人としての嗜みを教え諭し育てていく責任があると言えるのではないだろうか。

更に「第三の応用動作」については、「形でも、心でも、離れ離れでは生きてこない。心と形が常に協応し、生活のあらゆる場において臨機応変に活用されてこそ、その人の人格は生きてくるのである。どぎまぎしたり、ギクシャクしたり、またわざと粗雑に行うのは、形の教養の不足である。形式ばって自分一人よがりの行動は心の不足である。形と心の協応した、その人の教養にふさわしい言動になっていくことが、第三の応用力で、終局の目標は、当たり前前は当たり前前にできることで、そこに何となく嗜みの良さ、深さが偲ばれるということになる」と明確に述べられている。

6 自分の人格を大切にする

同様に「小笠原流伝書」では、このことについて、「他人を大切にすることは、自分を大切にすることから生まれてくるものである」と明記されている。このことは、利己主義、自分本位ということではなく、自分の人格を大切にすることであり、このことは所謂「自他の人間性を互いに尊重する」本学の建学の精神に繋がる。

自分の人格を大切にできて初めて他人の人格をも尊重することが出来る。そして他人の人格が尊重できて、初めて円滑な社会生活が成り立つ。それは、多くの経験を積むことで、徐々に生活のあらゆる事態に即応できる正しい態度が身に付いてくるのである。

日常生活のあらゆる場面を想定し、時・所・場面・相手によって対応できるようになるためには、基本的な立ち居振る舞いについて「なぜそうするのか」「なぜそうなるのか」といった裏付けの理論を深く学び、理解し実践に繋げ、自身の姿として身に付けていく必要がある。その「形」の意味づけを理解することによって、「形」の一つ一つが人格、品性として生きてくるのである。

毎日の生活の様々な場面一つ一つに於いて、意識し、主体的に自らの行動へと繋げていくことこそ正に「自身の姿」として育み育て、その大切な一つ一つの品性を「身に付けていく」ことになるのである。

7 大切なのは事理の自然

「礼とは、時・所・相手に応じた臨機応変の正しい生活態度として、現れるべきもので、このためには、正しい生活態度をわきまえていてこそ、社会生活を営むに当たって臨機応変の行動が出来るものだ」と伝書の中で述べられている。

更には、「知的な教養と言語動作の教養の両方が身に付いていれば、その場の雰囲気や即座につき、同時にその場に応じた行動となって現れる。そのためには、物の本質を捉え、その本質から出発する事理の自然が大切なことで、事理の自然を忘れた時には、どれほど正しく教えられたことでも偽物となり、死物となってしまふ。」とある。「形のみこだわり、部位にとらわれていては、魂を失った行動となる。」と、この「小笠原流伝書」の『修身論』の中で述べられている。

礼の理念については、次のように記されている。

「元来、法をもって生まれてきたもので、法を守るということは『春に恵み、夏に茂り、秋に色づき実る、冬は収まる。』これが法であり、『人畜草木、その節に違わなければ、それが法を守る』ということになると説明がなされている」ということである。誠の心を持って自然の理法に従い、時・所・相手に従って行えば、当然これが礼の心となり、形になってくるのである。

そして、最後に、「容儀、進退自然のごとく中度適式礼の成る世が求められている」とある。

現代の多忙な日常の生活の中で、我々がとかく忘れがちな「事理の自然」に心を寄せ、それを愛でる

心のゆとりを大切にしたいものである。

8 茶の湯のころ

「茶の湯 ころと美」(平成20年表千家監修)に基づき、本稿の論点を更に深めていく。

(1) はじめに

鎌倉時代はじめに抹茶を飲むことははじまっていたが、客の目の前にて、定められた手順により、すなわち点前として茶をもてなすことは、茶の湯の成立とともに始められたのである。

道具を揃えて点前をし、点てられた茶を目の前の客にもてなすために、主人はもとより、客もともにとり決めた手順を守り行うことが求められる。茶を点てる亭主と、客のために目に立たない様々な気遣い心遣いの中で心を込めて点てられた一服のお茶をいただく客との間に、一つ一つさりげない手順作法が繰り返され、その中で、各種の所作に型を生み出してきた。

たとえば、一服のお茶をいただく前に、客相互の礼を尽くしたのち、亭主に対して丁重な一礼をして、亭主に対する客の感謝の心を表す。

これは、主客の間に交わされる厚い心持ちが、作法として定められた型を生み出したのである。

そして、それぞれの型は「主客相互の心の表現」となり、型を正しく行うことによって、主客の心持ちを表出することが出来る。

茶室に静かに響く釜の湯の煮え立つ「松風の音」に耳を傾け、心を込め茶筌を振る「亭主の佇まい」に心を寄せ、茶室の内でのこうした主客の交わりは、心を伴った型としてつながり、重ね合うことによって、その内に込められた心持ちを届け合い確かめ合うものと言える。

(2) 作法と稽古

「茶の湯 ころと美」(表千家監修)の中で、「作法と稽古」について詳しく述べられている。「客の振る舞い・菓子のとりあげ方・薄茶のいただき方」を例に挙げ、具体的に見ていきたい。

・「客の振る舞い」について

客が茶室に入り、茶をいただくということになれば、まずどのような基本となる所作が必要となるのか、その作法を丁寧に身に付けていく時が稽古と言われるものである。

茶室に入るために戸口の所に座り、扇子を膝前に置いて、戸口を開け、扇子を持って室内に「にじって」入る。床の間の掛け物を拝見し、亭主がこの時のために心を込めてしつらえた道具を拝見するのである。扇子を前にして、拝見の前後に一礼する。室内を歩く時の足の運びは半畳を三步で、静かに摺り足で歩む。互いに共に茶をいただく客と亭主に対し、時に応じた礼や挨拶をする。そのことによって、客は主人に対し、主人は客に対し、また客と客との間に、互いに和の心持ち・なごやかな親しみの心持ちが表現され、それは大切な一時となる。

茶の湯の稽古には、まず茶室に座って、薄茶の一服を頂くところから始まる。茶室における客の座る位置は、通常床の間に近い方から正客、次客、三客と並ぶ。

客は膝の前の畳の縁から8寸(約24cm)ほど空けて座ることになる。ここへ運ばれた菓子をとるために置く懐紙や点てられた茶碗を置くことになるのである。

茶室に末客まで座られたら、亭主はまず生菓子を食籠に入れ、蓋の上に黒文字を一膳載せて、正客の前へ運ぶことになる。続いて干菓子をのせた盆も客にすすめられる。

・「菓子のとりあげ方」について

正客は、食籠や干菓子盆を縁の上座に置いて、亭主の茶を点てる姿に心に向けることになる。

亭主は薄茶を点てるため、道具を運び、点前を進めるが、客は亭主が茶碗に湯を汲んで茶筌を改める「茶

筥とうし」の始まるのを待って、主菓子や干菓子をとりまわす。

菓子のとりあげ方は、まず正客は食籠を次客との間に置いて一礼する。膝前に食籠を直して、亭主に「お菓子を頂戴いたします」と一礼する。亭主はそれに答える姿を示す。

懐紙を膝前に置き、食籠の蓋上の黒文字をとって、懐紙にあずける。食籠の蓋をとり、膝上で拝見する。蓋裏を返したまま器の右に置く。黒文字を使い、菓子を懐紙の上取る。黒文字の先を懐紙でぬぐい、いったん懐紙にあずける。蓋をしてその上に黒文字を置く。食籠を次客に送り、その後、菓子をいただく。

・「薄茶のいただき方」について

正客は、薄茶をいただく時、まず縁外に置かれた茶碗を右手でとり、左手に一端あずけ、右手で次客との間、畳の縁内に茶碗を置き、「お先に頂戴いたします」と挨拶をする。次客もこれを受けて一礼する。右手で茶碗をとり、左手で扱う。右手で膝前、畳の縁内に茶碗を置き、亭主に「お点前ちょうだいいたします」の一礼をする。右手で茶碗を時計回りに2度回し、正面から飲むのを避ける。絵柄のふさわしい部分や釉薬のかかり具合など全体の景色から正面が決められている。

茶碗を両手で持ち、お茶を一口ずつ味わっていただく。茶碗に抹茶が残らないように吸い切る。飲み終わったら飲み口を指でぬぐい、その指は懐紙で清めることになる。右手で茶碗を先ほどの反対方向（反時計回り）に2度回して、正面を戻し、茶碗を膝前に置く。

次に茶碗を拝見する。その茶碗は、亭主が客のために心を込めて用意してくれたものであり、更には、その茶碗を焼いた方、それに携わった方々がおられるのである。膝前に両手を付き、茶碗全体の姿を右、左の順に拝見した後、次に膝前で手に取り、低い位置で釉薬のかかり具合や内側そして高台・刻印など丁寧に拝見することになる。その後、最後にもう一度両手を付き、茶碗全体を心から拝見して、その拝見を終えると、茶碗を出された元の位置に戻し、主客の挨拶へと続く。

(3) 型に宿る心

稽古は、「古を稽う（いにしえをかながう）」と書く。正に古人を思い起こし、その一つ一つについて経験に習うことであると言える。

「茶の湯 ころと美」の中で、次のように記されている。

茶道の教授が、学校の授業のような講義形式を取らず、稽古の形でなされることには深い意味がある。茶道には、茶を点てる点前やその茶をいただくうえでの約束事が伝えられている。これを「型」といい、型を理屈として頭で知るだけではなく、からだで覚える。からだで古来の振る舞い方を身に付け、主と客が型を交わしあう。その型に込められた心を通わせ合い、人に礼を尽くし、大切なものをあつかう心身を養うのである。それが茶の稽古であると言われている。

型という振る舞い方を架け橋として、心のはたらきを呼び覚まし、人と人の心を結ぶのである。基礎的な点前や身のこなしを反復して稽古を重ねることで、からだを心を整え、やがては「礼節ある人格」をつくることをめざす。禅の修行に於いて、まず「座ること」が重んじられ、座ることこそが「悟りを開く最初の手がかり」とされる教えと相通じるものがあるといえる。

ここに、「礼節ある人格」とある。まさに、本学の建学の精神そのものと言える。

(4) お茶を点てる

「茶の湯 ころの美」では、次のように述べられている。

茶道に限らず、我が国での伝統芸能や芸道の修得には、稽古による修養が古くからの習いとされてきた。平安時代の歌人・藤原定家は、「ことばは古きをもちい、心は新しきをもちいる」と語っている。これを「伝統的な型をもって、日々新たな心でのぞむ」茶の稽古の心構えに置き換えることができるので

はないか。

先生の教えに従って、初心を忘れることなく稽古を積み、やがて、稽古に励む人の胸中に、茶の心の深遠に思いをいたす日がおとずれる。「茶の稽古」が心の修養としての深みを持ち、やがて、長い年月を重ねた「茶の湯の所作」と「日々の暮らしの心がけ」が一つになるのである。

その心を磨く稽古の一途にこそ、主と客の間に、自在に心の通いを深め、おいしいお茶をもてなし、一服のお茶を囲む豊かな楽しみを得ることができるのだと言えるのではないだろうか。

千利休の点前の伝統は、「淡々として水の流れるが如く、すらすらと淀みなく進んで、後に何も残さない点前を良し」とする。

まさに「目に立つならば、それも不躰」。殊更に所作が人の目に付くことは好まれない。亭主の所作が自然で、飾り気がなく、簡素さの中に心遣いがこもることで、深い精神的な境地や心と振る舞いが一体となった「奥ゆかしさ」が、客人の心根に届くと考えられてきた。それが、まさに「侘茶の心」である。その心を磨き、一つ一つ自身の姿として身に付け、大切な人としての嗜み・品性として磨かれていくことは嬉しく有り難いことである。

(5) 現代の茶の湯

このことについては、同様に以下のように記されている（「茶の湯 ころろの美」表千家監修）。

昭和15年頃を境に、数寄者の茶が衰退してゆく中で、家元を中心とする流儀の茶の湯が大きな発展を見せたといわれている。昭和15年は利休350年忌にあたり、三千家によって法要と茶会が開かれたが、明治維新の頃に多くの弟子が茶道から離れたことも昔語りとなり、再びたくさんのお茶を学ぶ人びとがその法要に参加した。

興味深いことは、その多くが女性であったことである。近代の女子教育の中に茶の湯が取り入れられたことも一つの理由だが、それにも増して茶の湯は近代の女性にとって必須の教養となったからである。家元を中心とする茶の湯の隆盛は、その後の様々な歴史の中で静かに見事な発展を遂げ、日本を代表する伝統文化として、今日国内外で広く認められるに至ったのである。

現表千家家元の千宗佐は、その著書「茶の湯 ころろと美」の中で、次のように記している。

千利休の孫、元伯宗旦の言葉に、「茶の湯とは、耳に伝えて目に伝え、心に伝え、一筆もなし」とあるように、本来、茶の湯は画面を通して、あるいは一冊の本によって理解されるものではないのかもしれない。茶室で主客が向き合い、また、実際に道具を手にとることで、そのころろと美を肌で感じ取るものといえるでしょう。（千宗佐，2007）

人と人との繋がりが希薄になり、心の渇きを感じるようになった現代社会の中で、この「茶の湯のころろ」は人々の心を癒やす大切な掛け替えのない貴重な文化遺産として、これからも一つ一つ大切に次世代へと受け継がれていくことであろう。

9 考察

「心を形に表す礼儀作法に関する一考察」として、本稿では「茶の湯のころろ」いう視点から、今日まで受け継がれてきたこの日本の伝統文化について、一つ一つ紐解いてきた。

古の昔より、先人達がそれぞれの思いを丁寧に大事の一つ一つ暖めながら、心を動かし、その時々様々な人たちがそれぞれの関わり方で、「茶の湯のころろ」を一つの大切な文化として次の世代へと静かに受け継ぎ、誠実にひたむきに創造力や感性を磨き、それを楽しみ味わい、更にまた次の世代へと大事に繋げ、今日に至るのである。

この茶の湯のころろは、千利休の時代から何百年という年月を経て、今日に至る。その一つ一つの時

代の変遷の中で、それに関わった一人ひとりの熱い思いが、互いの立場を尊重し互いにその心を大切にしながら、「一つの文化」として大切に育み育て、創り上げられてきたその「姿」として、克明に写し出されてくるのである。

春夏秋冬四季折々に、茶会や献茶の会が日本各地で催される。茶席へのお招きを受けた客は、寄付きから露地を出て、手入れの行き届いた露地を眺めつつ、席入り前の心の準備を整える。

その露地は四季折々の自然を写してその亭主の心遣いが静かに伝わってくる。所々に燈籠や大小の石が配され、足元は緑の苔におおわれて、様々な形の飛び石が美しく、その間をぬって茶室へと導いていくのである。

「お茶会」と一口に言っても、季節の道具の取り合わせ、床の設え、濃茶・薄茶の準備、主菓子・干菓子の取り合わせ、炭の準備、水の準備、茶室の掃除・露地の手入れ等々・・・客をもてなす亭主の心配りは、如何ばかりか、一つ一つ挙げていくと数え切れないほどの心遣いがそこにはあるのである。しかし、亭主の気遣いは、決して苦痛でも大変なことでもないのである。

むしろ、有り難く幸せな思いに包まれるものなのだ。なぜならば、お招きした客人はそれぞれの貴重な時間を割いて、遠くから足を運んで来て下さるのである。有り難い一時となるのである。

人間の研究 I a「礼節」の講義の中に、茶道の単元がある。本学で学ぶ学生達は、1年生の前期の単元が終了し、その後の夏季休業中に「課題」として、茶道の「歴史的背景、道具、茶室、亭主の心得、客の心得」の五つのテーマの中から一つ選択をして、そのテーマについて詳しく調べ、深め、研究発表資料としてレポートを作成する。そして、後期がスタートし、皆の前で全員が自身の研究内容を発表し合い、互いに学び合う場を設ける。

学生達は、その過程で、「一服のお茶」への思いを深めていくことになるのである。

学生一人ひとりが、自身の言葉で研究発表を行い、自分の心で感想を述べた後のその清々しい表情から、一つのことに対し全力で取り組み、日本の伝統文化というものを深く調べ知り得た充実感と達成感が伝わってくるようである。全員参加型の研究発表は、実に爽やかな一時となる。

その後、割稽古を行い、学生の全員が各自でお茶を点て、自服の時間を持つ。抹茶の量と湯の量、そして茶筌の振り方は十分であったか、自服することで検証することが出来るのである。

この時間は、大変大事な一時となる。初心者でも（おそらく数人を除いて、殆どが初めてである）茶会の流れ、客としての振る舞い、亭主としての振る舞い等々咀嚼し理解し、修得していく貴重な時間となる。そして、次時は、一客一亭の「一期一会の茶会」を設けるのである。

学生達にとって、この「一期一会の茶会」は夏季休業中に研究した内容を改めて振り返り、茶室に静かに響く松風の音を耳にしながら、改めて茶の湯の心に触れ、得心する時となるのである。

10 おわりに

筆者の茶の湯との出逢いは、学生の頃である。当時お世話になった茶道の先生は実に優しく、そして厳しくこの初心者である弟子を鍛えてくださった。栄養学を専門に学んでいたため、お茶の成分と効能を調べた時には、そのすばらしさに胸が躍ったことを今懐かしく思い出す。その時の感動は忘れがたい。茶道について深く学び、稽古を重ねていく過程で、改めてこの日本の伝統文化のすばらしさに心打たれ、機会あるごとに京都の茶事に参席し、今日に至っている。

さて、次世代を担っていく学生達に、今だからこそ大切に伝え受け継いでいかなければならないものがある。その一つが、入学後の1年間30回の「人間の研究 I a 礼節」の講義の中で修得していくこの「心を形に表す礼儀作法」ではないだろうか。

これは、まさに日本の長い歴史の中で、今日まで大切に先人達から受け継がれてきた貴重な日本の文

化遺産の一つと言える。次世代を担っていく学生達一人ひとりに、その「心」を伝え、彼らが「心」で感じ取り、咀嚼し理解し、一つ一つ丁寧に自身の「姿」として身に付け、日本人として一人の成人として、彼ら自身がこの素晴らしい日本の文化を愛し、更に次の世代の子ども達へ「人として大切なこと」としてしっかりと伝えていってほしいものである。

最後に、本学で学ぶ学生達一人ひとりが、この「心を形に表す礼儀作法」をしっかりと身に付け、「茶の湯のこころ」を大切に温め磨き、楽しく味わい、更なる豊かな人生への第一歩に繋げていくことを期待したい。

これからの次世代を担う学生達である。一つ一つ学び得たことを大切な自信と誇りとして、それぞれが自分自身の夢に向かって真っ直ぐに前を向き、その大切な一步を踏みだし、大きく前進していくことを願いたい。そして、その過程に於いて一つ一つ深く広く学び取り、人としての品性を磨き、良き人生へと繋げていって頂きたいものである。換言すれば、これからの人生に於いて、折に触れてこの素晴らしい日本の伝統文化である「心を形に表す礼儀作法」や「茶の湯のこころ」を一つ一つ深め、楽しみ味わうことのできる機会を見出し、やがてはこの大切な「心」を次世代へと丁寧に繋いでいく役割を担っていく存在になってもらいたいと切に願いたいものである。これからの学生達一人ひとりの更なる成長に期待したい。

【参考文献】

千 宗左 (1990), 『客の作法』主婦の友社

表千家監修 (2008), 『茶の湯 こころと美』河原書店

小笠原清忠 (2015), 『小笠原流の伝書を読む』日本武道館

小笠原清基 (2015), 『小笠原流 美しい大人のふるまい』日本実業出版社